

二つの荘園と山上の二つの集落
甲斐を歩いて歴史を考える

●身延線

小学校5年生まで、静岡県の吉原市（現在の富士市）に住んでいた。父は東海道線を使って東京へ頻繁に行き来していたので、カバンの中にはいつも鉄道弘済会の時刻表が入っていた。

町の外れ、と言うよりも隣町だったのかもしれないが、身延線が走っていた。チョコレート色の厳めしい車両が踏切を横切っていく姿をわざわざ見に行ったことが何度かあった。

父の時刻表を借りて身延線を調べて見た。地図を見ながら時刻表の駅名を追いかけていくと、東海道線の富士駅を出た電車が、富士川を遡るように走って、富士山の反対側の甲府盆地に向かう景色が想像できた。時刻表で駅名を辿りながら、地図で景観を想像する楽しさをおぼえたのがこの頃だったかもしれない。

市川大門（いちかわだいもん）という駅名も、そんな経緯でおぼえた。地図を見ると、笛吹川と釜無川が合流して富士川と名を変えたあと、鵜沢の急流に入る前に一息つくような場所にある町だった。

それから何十年もの時が流れて、ある日地図を開いてみたら、市川大門という町の名はなくなってしまい、市川三郷町という名前に変っていた。駅名は市川大門のまま残っていたのでほっとした。

●市川三郷町

地図はこちら <https://yahoo.jp/86E5hH>

市川三郷町（いちかわみさとちょう）は、平成17年に、市川大門町と隣接する三珠町・六郷町が合併して誕生した。面積は75平方km・人口17,900人の町。

三つの町の名前から文字を寄せ集めて、さらに「三つの郷の合体」を意味して「市川三郷町」という町名が付けられたらしい。過去に遡れば、三珠町は三つの村の合併で生まれたもので、六郷町も六つの村の合併で生まれた。数字で表現するのが好きな地域性があるのだろうか。

市川大門町は、律令制の時代には巨摩郡の市河郷と言われており、市河荘が成立していた。

安和2年（969年）の京都法勝院の所領目録に市河荘が記載されている。法勝院は藤原良房が惟仁親王（のちの清和天皇）のために創建した貞観寺の子寺で、甲斐国の荘園としては初のものだった。

中心部の位置は、現在の市川三郷町平塩岡付近とみる説が有力らしい。

二番目にできた荘園は、現在の南アルプス市・鵜沢町・市川三郷町黒沢にまたがる大井荘で、元永2年（1119年）に源基俊が娘に譲渡を申し出た記録が残されている。

八幡太郎義家の末弟である源義光（新羅三郎）は、永保3年（1083年）後三年の役で義家と共に安倍定任を討伐して、その功で常陸國佐竹郷（現在の常陸太田市）を所領とし、佐竹氏の始祖となり、常陸國武田郷（現在のひたちなか市武田）も譲り受けた。義光の子である義業は佐竹を継ぎ、次男の義清は父から武田郷を譲り受け、武田氏が生まれた。現在の地図で確認すると、武田郷は常磐線の勝田駅の南方に位置する。

天永元年（1110年）義清の嫡男清光が誕生、大治5年（1130年）清光は武田郷と隣接する郷との境界線をめぐる争いを起こし常陸大掾平盛幹と争うことになった。結果として敗北して、義清・清光親子は天承元年（1131年）甲斐國市河荘に配流された。義清・清光親子は市河に土着して、その子孫が各地に住み着いて甲斐源氏の基盤を作った。

現在の市川本町駅の南側に広がる、平塩岡に源義清の居館があった。義清の子孫らは甲斐の各地に拠点を持ち、加賀美氏・小笠原氏・南部氏などを輩出した。また、清光の子信義の流れはのちに甲斐武田氏を生み、甲斐武田の始祖とも言われている。

この辺りは笛吹川の支流である芦川の清流を利用して、江戸時代から和紙作りが行なわれてきたこと、花火作りの里としても近年知られるようになった。

江戸時代に、駿府城の紺屋町陣屋の出張陣屋として代官所が置かれたのが始まりで、後に本陣屋になった。この陣屋の存在から「市川大門」という地名(呼称)が生まれたと言われているので、市川という地名は平安時代に遡る地名ではあるが、市川大門という地名はさほど古いものではないらしい。

●黒沢という集落を歩く

鰍沢口駅から南へ 5~600mほどの黒沢という大きな集落に入ったのは9月の初めの、まだ頭上から厳しい暑さが襲いかかるような日だった。黒沢は、富士川の支流である新川に沿った街道沿いにあり、新川と富士川本流とに挟まれた山の向こうまで広がる広さだが、集落を形成しているのは街道沿いに限られる。 地図はこちら https://yahoo.jp/n_B7KW

鰍沢口駅から下部方面に向かう県道を歩くと、宮澤寺・妙学寺など日蓮宗の寺ばかりが目立つ。寺はことごとく東側の山を背負い山懐に貼り付くように建ち、しかも長い石段を構えて少し高い所に座している。背にした山からは絞り水が流れ出していくつもの水路が家々の軒下を流れて、静寂な集落に静音を響かせながら新川に落ちている・

目の前を流れる新川の氾濫によってしばしば被害を受けた集落らしい。

県道沿いに30分ほど歩くと、地区の名前を冠した立派な「自治公民館」が所々に建っていることに気がついた。自治公民館の名前を拾ってみると、どうやら昔の字地名(つまり大昔の村)の名前と一致することが読み取れた。千年以上の時空を越えて「集落=村」が、まだ生きているようで嬉しくなった。

南東から北西に向かって流れる新川の左岸には海拔 400m~500mの山並みが連なり、その山並みの西側は富士川の急流が作った河岸段丘になっている。

地形図を眺めていたら、この河岸段丘の上にも集落があることがわかった。よく見ると富士川に架かる富士橋の南側あたりから、河岸段丘地に上がっていくヘアピンカーブの道路が一筋走っていることがわかった。ここへ上がれば鰍沢から身延へ向かう急流が見られるかもしれないと勝手に想像を膨らませて、そこへ行って見ることにした。

●山上の集落「大木(おおぎ)」

富士橋はやや上流に新しく架け替えられて、古い橋の撤去工事が始まっていた。

何回かの屈曲を繰り返しながら上っていくとT字路にぶつかった。正面には集落、道祖神と山の神の小さな祠が出迎えてくれた。掲示板や様々な設置物に書いてある文字を読むと、ここは「大木地区」であることがわかった。「大木」の読みは「おおぎ」なので、何か面白い由来があるのではないかと期待した。集落の中には「大木地区自治公民館」と書いた立派な建物が見えた。

帰宅後に調べて見たら、「大木地区」は44世帯・人口112人の集落で、花火と和紙作りを専らとしており、養蚕も続いている集落だということだった。平成8年に建てられた地区の案内図(掲示板)を見ると、この集落の各世帯の苗字を見ると、小池(19軒)と渡辺(17軒)が多く、水野(4軒)ほかという感じだった。それぞれの家同士の関係もわかれば面白いと思うが、そこまでは調べようがない。

その昔、大木氏がこの地を押さえており大木村と名が付いた。今川國氏の三男政氏の子である今川政義が大木氏を名乗っていたことに由来する地名とのことだった。鎌倉時代の武将今川國氏は寛元元年(1243年)に生まれて弘安5年(1282年)に没しているので、源義清親子が市河荘へ流れてきた時期とは重ならない。國氏は足利義氏の孫で三河国今川荘の地頭をしていた人で、後の世で活躍した今川氏の始祖になる。その三男である今川政氏は越前や大隅で「木田氏」となったので、政氏の子である政義が「木」の字を冠した「大木氏」を名乗ったのもなるほどと頷ける。

今川氏の家系・歴史も少々気になってきたので、少し調べて見ることにした。

室町時代と言うよりも戦国時代の始まりの頃と言った方が良いか、今川氏親は文明3年(1473年)に8代当主今川義忠の子として生まれた。永正12年(1515年)に甲斐國西方の領主大井信達に身方して守護武田信虎と戦い、勝山城を占拠。のちに永正14年(1517年)に和議を結び、大井信達は武田信虎に降伏。しかし、その後も何度か今川氏親と武田信虎の対立は続いたらしい。戦国時代に名を馳せた今川義元は、氏親の息子で11代当主だった。今川家は代々臨濟宗を拠り所としていたが、今川氏親だけは曹洞宗を重んじていた。

T字路を左(東)へ進むと曹洞宗の大増寺(だいぞうじ=地図 <https://yahoo.jp/-qH4KW>)があり、さらに進むと山梨県警のヘリポートが広がりフェンスで囲まれていた。昭和57年に過疎地への対策として山頂にヘリポートを作ろうとしたら、旧石器時代・から縄文時代のものと思われる遺跡が発掘された。家の前・寺の前・宮の前という三つの遺跡群が一行に並んでいたという。

傍らに建つ神明社の祠が集落を見下ろす角度で建っていたことから、古代より人々の日々の営みがあった山上の集落であることが想像できる。

様々な資料を調べて見た結果、大増寺の場所に大木氏の居館があったということまではわかったが、それ以上のことはわからなかった。日蓮宗が主流と思われる地域で、曹洞宗の立派なお寺があるのは今川氏親との関係かもしれない。また、室町時代から戦国時代にかけての今川氏と武田氏との関係を考えると、何か微妙なものが潜んでいるのかもしれない。

●もうひとつの集落「法師倉」

T字路に戻って、今度は道祖神から右(西)へ進路をとってみた。集落がある窪地には畑があるが、ネットやフェンスで囲まれている所が多く、野生動物との戦いが大変そうな感じがした。

大木集落の道祖神から小さな起伏をいくつか越えて1.5Kmほど奥へ進み、388m峰の西側の窪地のようなところに再び小さめの集落が現れた。

地形図を見ると、「法師倉(ほしぐら)」という集落だとわかった。

ここも軒先を接するような密な集落で、家と家の間に細い路地が迷路のように走り、間違えて車が入ると抜け出せなくなりそうな感じがする。集落の入口に三宮神社があり、西端に日蓮宗の相延寺とその墓地が広がっている。(地図 <https://yahoo.jp/NNn-8K>)

墓石を見ると丸山姓のものばかりだが、寺の脇の地区案内図を見ると、どの家も苗字は丸山になっていた。墓石の中には硯石を象ったものもあったが墓碑銘がなかった。富士川をやや下った対岸の雨畑は硯の産地なので、誰かゆかりの人がこの地に存在したのか、それとも硯の供養なのか。

墓地の奥に小さな階段があるので上っていくと、「七面宮」と表示した奥の院のような小さいながらも海鼠壁の祠が建っていた。祠の後にはもう何もなく、樹木の間から富士川の眺めを見下ろすことができた。秋になり落葉してしまえば、かなりしっかりとした景観が楽しめそうだ。

七面大明神(七面天女)は日蓮宗の世界では法華經を守護する女神。身延山の南側に座す七面山の山頂にある敬慎院には七面大明神が祀られている。厳冬期に深雪の中を登った日を思い出す。

この七面宮も、相延寺の守護神として七面大明神を祀ったものと思われる。

「法師倉」という地名は「勝示倉」の転訛ではないかとする説があるらしい。「勝示(ほうじ)」は荘園の境界線に打たれた杭や石柱のことなので、「勝示倉」は資材を収納する倉があったということか。この説が正しいとすれば集落の発生時期が荘園の時代だったことになる。

徳治2年(1307年)の文献に「甲斐國大井莊南条黒沢村」という表記が残されているので、黒沢村は大井莊の南端にあったことになるらしい。この情報から読むと、法師倉は大井莊の南端に位置して「勝示」が建っていたところということを示すものという解釈も成り立つ。

山上の二つの集落は離れており、一体のものなのか、成立ちが異なる別のものなのかも気になる。

大木集落は古代から住み着いていた人達の集落の名残なのか、途中にいくつかのドラマがあった末の形なのか、法師倉の集落は北の大木集落から分離して出来たものなのか、後の世で富士川側から河岸段丘を登ってきた人が作った集落なのか、はたまたもっと大きな出来事が間に挟まっているのか興味は湧くが、史実はよくわからない。

八代郡の市河荘、巨摩郡の大井荘の時系列で見た関係などがもう少し詳しくわかると、集落の存在と荘園の関係や、集落の存在とそこを押さえていた武士との関係なども解明できるのかもしれないが、旅の余韻は十分に楽しむことができたので、まずはこの辺で一旦締めくくることにした。

以上